



奈良市第4次総合計画

序 論

序 論

① 総合計画策定の経緯

総合計画は、市政運営の根幹となるまちづくりの目標を明らかにし、これを達成するための基本方針を示すものです。

2001年（平成13年）2月に策定した「奈良市第3次総合計画」が、2010年（平成22年）に目標年度を迎え、これまでの計画による成果と課題を踏まえ、人口減少社会の進行をはじめとする近年の社会経済環境の変化に対応した新しいまちづくりの目標を示すため、「奈良市第4次総合計画」を策定しました。

◆総合計画の変遷

1982年 奈良市基本構想

1984年 奈良市基本計画

「未来にのびゆく国際文化観光都市
ー伝統と調和のとれた新しい住みよいまちづくり」



1991年 奈良市新総合計画

「歴史と自然と生活文化が織りなす、
創造と交流の世界都市ー奈良」



2001年 奈良市第3次総合計画

「世界遺産に学び、ともに歩むまちーなら」



2011年 奈良市第4次総合計画

「市民が育む世界の古都奈良
～豊かな自然と活力あふれるまち～」

② 計画の構成と期間

第4次総合計画は、基本構想、基本計画及び実施計画で構成しています。

(1) 基本構想

基本構想は、2020年度（平成32年度）を目標年度として、奈良市の都市の将来像を設定し、その実現に向けた市政運営の基本方針を定めています。

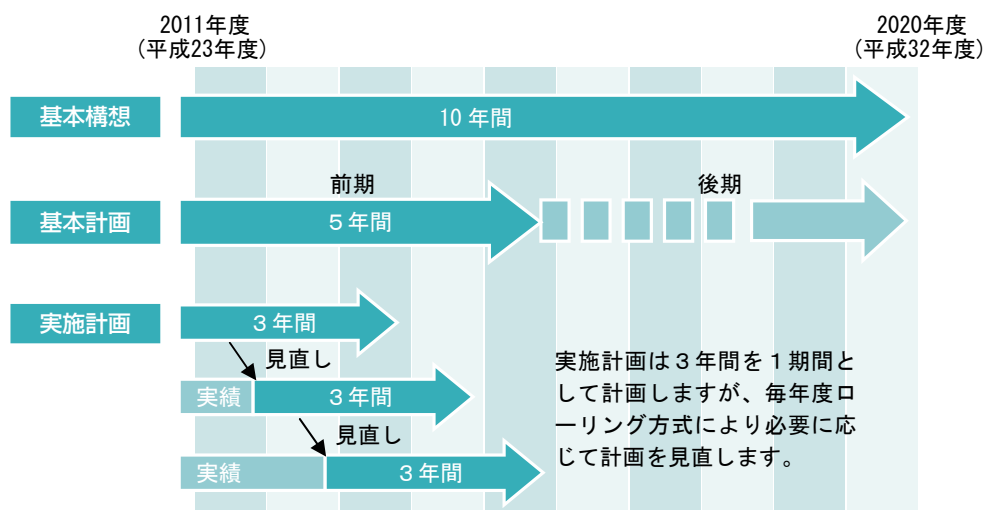
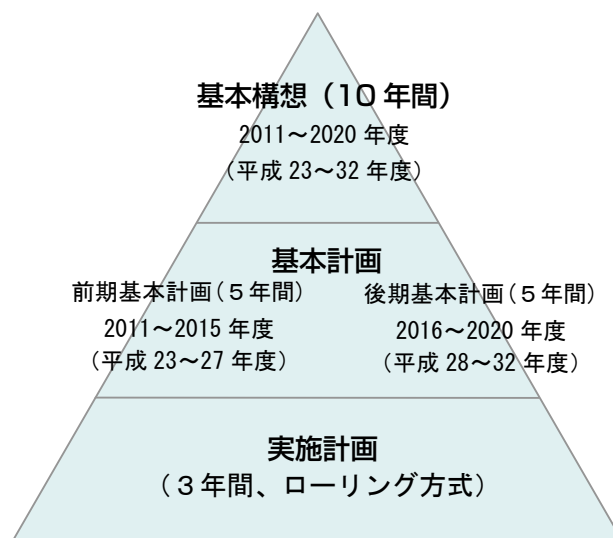
(2) 基本計画

基本計画は、都市の将来像の実現に向けて取り組むべき施策を体系的に示し、施策目標と展開方向を明らかにします。計画期間は、2011年度（平成23年度）から2015年度（平成27年度）を前期、2016年度（平成28年度）から2020年度（平成32年度）を後期とします。

(3) 実施計画

実施計画は、基本計画に示す施策に基づいた具体的な事業の実施内容を示します。2011年度（平成23年度）を初年度に毎年度、向こう3年間の計画として見直しを行います。

奈良市第4次総合計画



③ 自然条件

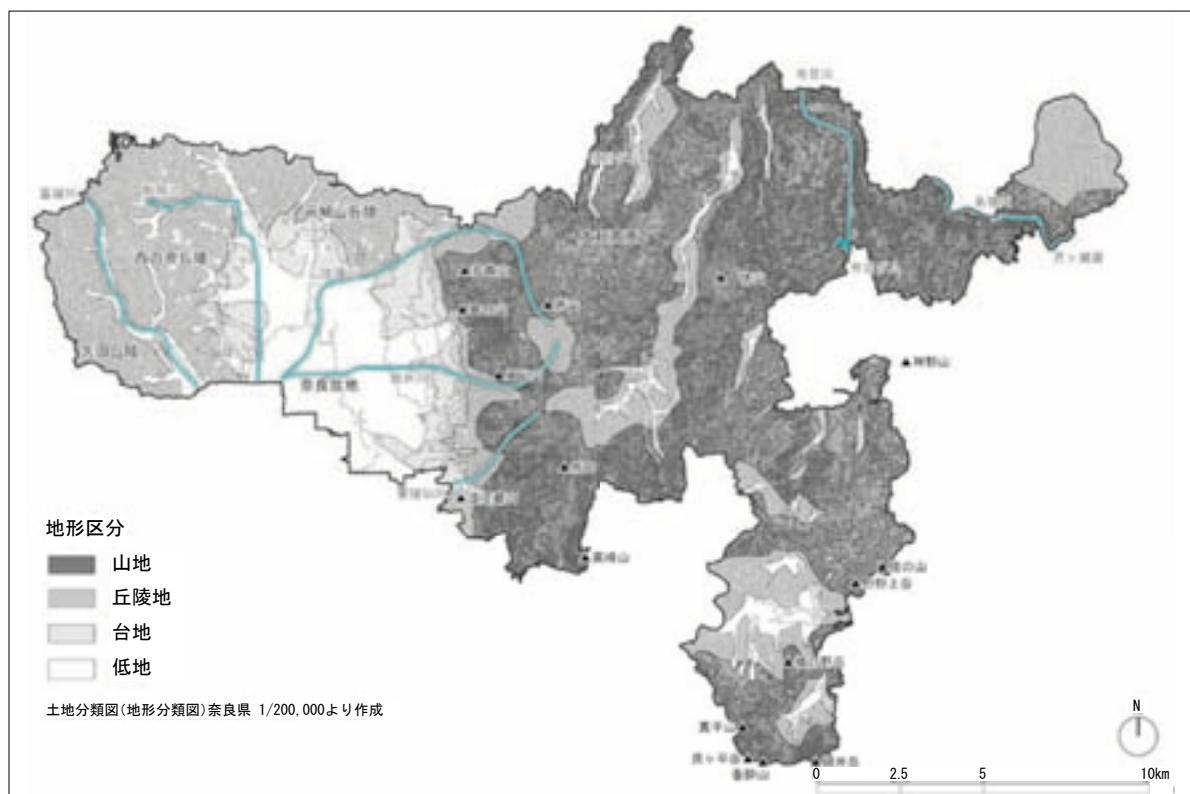
(1) 地勢

本市は、奈良県の北部に位置し、西は生駒市、南は天理市、大和郡山市、桜井市、東は宇陀市、山辺郡山添村、三重県伊賀市、北は京都府木津川市、相楽郡2町1村と接しています。面積は276.84㎢、東西33.51km、南北22.22kmで東西に長い形をしている本市は、春日山を境に地勢が異なります。

春日山以东の地区は、標高200～600mのなだらかな山地状の地形が広がる大和高原の北部に位置し、布目川、名張川などが山あいを北に向かって流下し、木津川に合流します。南端には、大和高原第一の高山である貝ヶ平山(標高822m)をはじめ香酔山(標高796m)、額井岳(標高812.6m)などが笠置山地に連なっています。春日山以西の地区は、奈良盆地(大和平野)の北端に位置する平坦部で、佐保川、秋篠川、岩井川などが盆地の南部に向かって流下し、大和川に合流します。地区西部には西ノ京丘陵と矢田丘陵の一部が延びていて、両丘陵の間を富雄川が南流し、大和川に合流しています。地区北部は、いわゆる平城山丘陵で京都府南端の丘陵地に接しています。

本市の自然環境は、その地勢上、東部地域は山林など緑や自然が豊富ですが、西部地域を中心に宅地開発が進み、自然や緑が減少してきました。

しかし、中央市街地を囲む自然は、春日山・佐保山・平城山風致地区として保全され、世界的な歴史的文化遺産の風情を醸し出す要素となっています。



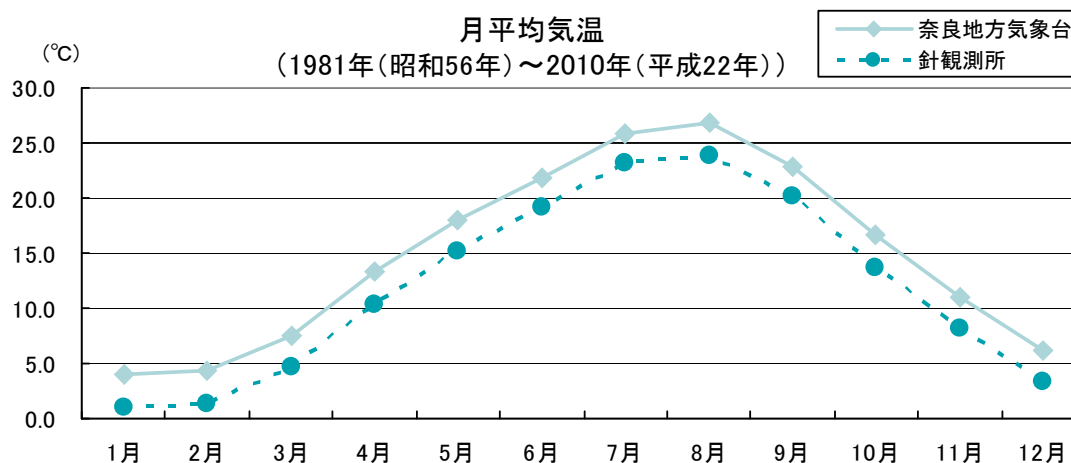
(2) 気 象

本市は、山岳によって海岸から隔てられているため、年間を通じて寒暖の差が大きい内陸性の気候を現します。

■気 温

本市の月平均気温分布をみると、夏は高温で冬は低温と年較差は大きく、大和高原地区は奈良盆地地区に比べ年間を通して2～3℃低くなっています。

最低気温は、奈良地方気象台では1977年（昭和52年）2月16日に－7.8℃、針観測所では1984年（昭和59年）2月20日に－12.2℃、最高気温は、1994年（平成6年）8月8日に奈良地方気象台で39.3℃、針観測所で35.3℃を記録しています。

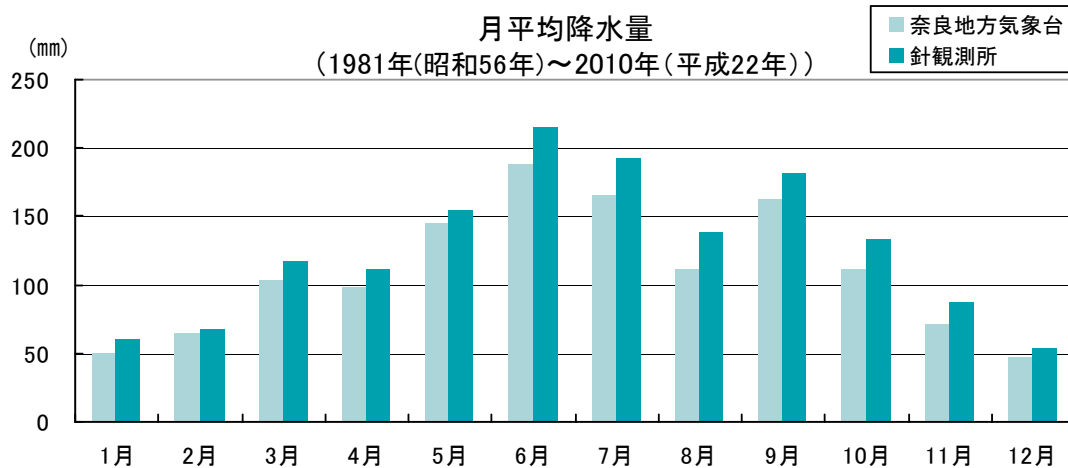


■降水量

本市の年平均降水量は、1,300mm程度（平成18年～平成22年平均）であり、あまり多いとはいえず、このため、水田かんがい用水の不足を補うため池が多数つくられています。

月平均降水量は、6、7月の梅雨期と9月が多く、大和高原地区は奈良盆地地区に比べ年間を通して降水量が多くなっています。

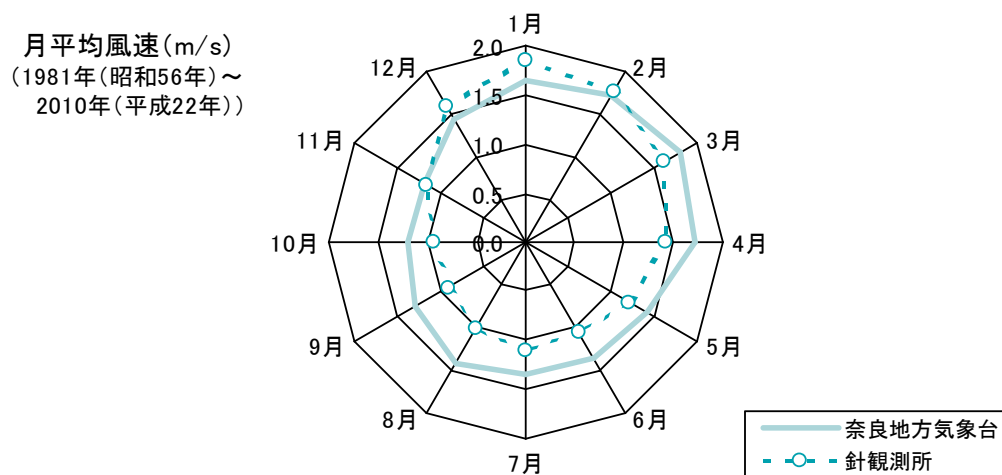
最大日降水量は、奈良地方気象台では1959年（昭和34年）8月13日に182.3mm、針観測所では1982年（昭和57年）8月1日に220mmを記録しています。



■風 速

本市における風の強さは、真冬から春先にかけての期間が最も強く、その他の季節は比較的穏やかです。

最大瞬間風速は、奈良地方気象台で1979年（昭和54年）9月30日に47.2m/s（風向：南）を記録しています。



④ まちづくりの歩み

ナラの地名については、『日本書紀』の崇神天皇の条に「大彦命（おおひこのみこと）と彦国葺（ひこくにぶく）の軍が武埴安彦（たけはにやすひこ）の軍を迎え撃つため陣を布いたとき、兵士たちが草木を踏みならしたので、その山を那羅山といった」という伝説がのせられています。また、一般に古代人の住居に適したなだらかな丘陵地を意味する平地（なるじ）、平（なら）などのナラとする説や、渡来人の居住地を古代の朝鮮で国を意味する言葉からナラと名付けたことから、ナラの地名がおこったとする説もあります。

ナラには、那羅・奈良・奈羅・櫛・平城・乃楽・寧楽などの漢字が当てられ、奈良時代の官用には主に「平城」と記述され、平安時代以降は「奈良」が広く用いられるようになりました。

奈良を歴史の表舞台に登場させたのは平城京の造営でした。710年（和銅3年）に都が藤原京からこの地に遷されてから70余年の間、奈良は、古代日本の首都として栄え、天平文化の華を咲かせました。

都が奈良から遷されると政治都市であった平城京は荒廃しましたが、平城京に建立された諸大寺はそのまま奈良に残され、奈良は社寺の都として生まれ変わり、政治の中心である平安京に対して、南都と呼ばれるようになりました。

東大寺や興福寺が発展するにつれ、寺の仕事に携わる者など多くの人が集まり、寺のまわりに住む人が増え「まち」が形づくられ、境内地の外にできた「まち」は郷（ごう）と呼ばれ、商工業が盛んになるにつれて新しい郷が生まれました。1180年（治承4年）の平氏による東大寺、興福寺の焼討ちにより、諸郷も大きな被害を受けましたが、両寺院の再建が進むとともに郷も復興し、13世紀には、郷の組織も整うようになり、今日の奈良のもとがほぼ形づくられました。

室町時代から奈良の名産として、酒、墨、刀、甲冑、団扇などが知られていましたが、江戸時代になってめざましい発展をとげたのは麻織物を白く晒しあげた奈良晒で、江戸時代初期の奈良は奈良晒をはじめとする産業の町として活気を呈しました。その後、戦国時代の兵火で焼け落ちていた大仏が復興された江戸時代中頃から奈良見物に訪れる人が多くなり、奈良はしだいに観光都市としての性格を強めていきます。

明治維新の後、1871年（明治4年）の廃藩置県により奈良県が誕生しますが、一時期堺県や大阪府に合併されたため近代都市化が立ち後れてしまいました。

1887年（明治20年）奈良県が再設置され、奈良に県庁が置かれました。1889年（明治22年）には町村制がしかれ、1898年（明治31年）2月1日面積23.44㎢人口29,986人で市制が施行されると、近代都市として発展する素地や施設が徐々に整い、奈良市は政治、文化、交通の中心となる県都として発展しました。

奈良は幸いにも第二次世界大戦の大きな戦禍を免れ、貴重な自然や文化財を残すことができました。1950年（昭和25年）「奈良国際文化観光都市建設法」が住民投票の結果を受けて成立し、

奈良市のもつ文化的、観光的価値を将来に生かした近代都市づくりを進めていくことになりました。

また、この頃から近鉄学園前駅周辺において宅地開発が進められ、高度成長期に入ってから、西北部丘陵一帯にも宅地開発が広がり、近畿圏から多くの人々を迎え、住宅都市としての機能も併せ持つこととなりました。

1988年（昭和63年）に策定された「関西文化学術研究都市の建設に関する計画」においては、奈良市の「平城宮跡地区」と奈良市を含む「平城・相楽地区」が文化学術研究地区に指定されました。

1998年（平成10年）2月に奈良市は市制100周年を迎え、同年12月には「古都奈良の文化財」として東大寺、興福寺、春日大社、春日山原始林、元興寺、薬師寺、唐招提寺、平城宮跡の八資産群がユネスコの世界遺産リストに登録されました。

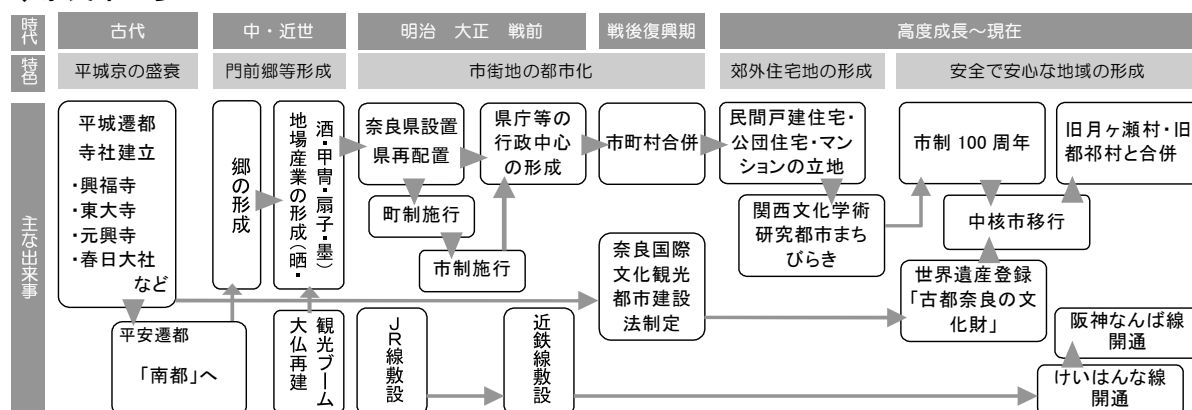
2002年（平成14年）4月には、全国で29番目の中核市に移行し、保健福祉や都市計画などのさまざまな分野で多くの権限が移譲され、これまで以上に主体的なまちづくりに取り組むことができるようになりました。

2005年（平成17年）4月、月ヶ瀬村、都祁村を編入合併しました。旧月ヶ瀬村は豊かな自然と名勝「月ヶ瀬梅林」を持つ景勝の地であり、大和茶の産地としても知られています。

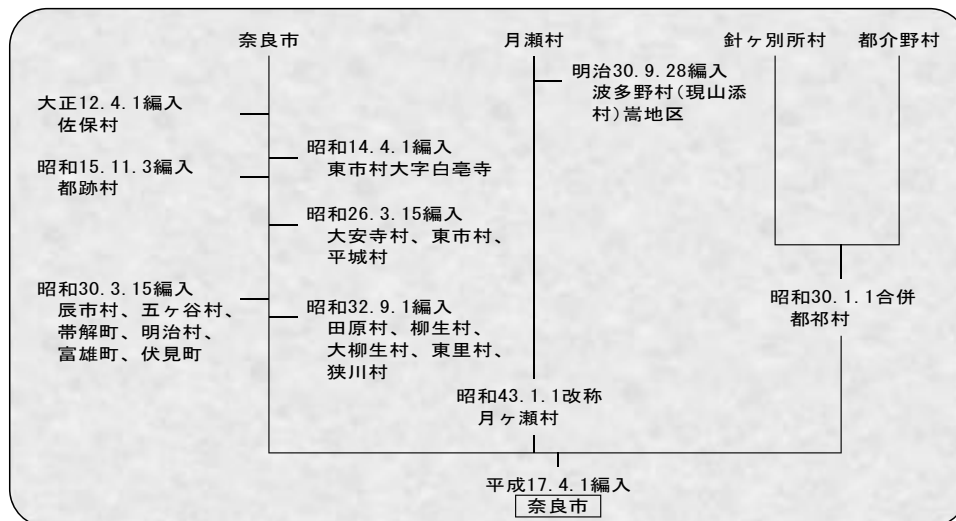
また、旧都祁村は、伊勢や伊賀に通ずる伊勢街道の要衝の地として文化交流が盛んな土地がらで、1965年（昭和40年）の国道25号（名阪国道）の開通以降、工業団地や住宅の開発も進んできた土地でもあります。

2006年（平成18年）3月には、「けいはんな線」が開通したことで、西北部地域と大阪・東大阪沿線エリアとの結合が、2009年（平成21年）3月には「阪神なんば線」が開通したことで、阪神エリアとの結合が容易になり、人・物・情報・文化・産業の交流が一層活発になるものと期待されています。

◆奈良市の歩み



◆市村域の変遷



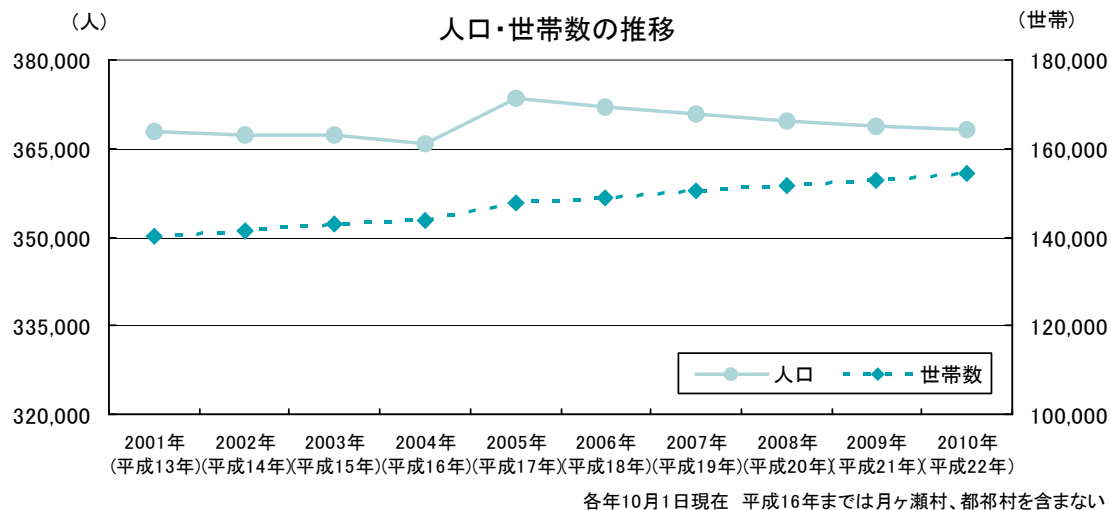
⑤ 奈良市の現況

(1) 人口・世帯

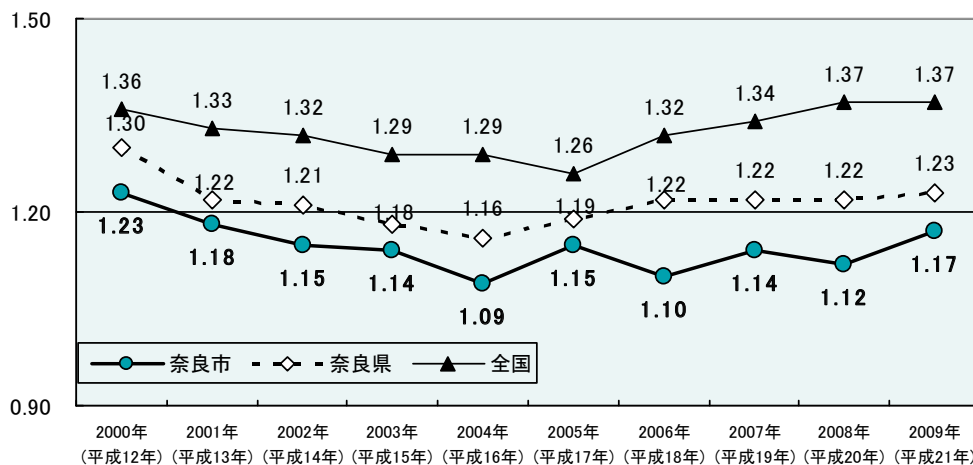
本市の人口は、2000年（平成12年）の37.5万人（※旧月ヶ瀬村、旧都祁村を含む。）をピークに減少傾向が続いており、2010年（平成22年）10月現在36.8万人となっています。

また、本市の合計特殊出生率は全国、県と比較しても低い状況にあり、14歳以下の年少人口が徐々に減少する一方で、65歳以上の高齢人口は増加し、2000年（平成12年）には高齢人口が年少人口を上回るようになりました。

本市の世帯数は、2010年（平成22年）10月現在154,323世帯で、増加が続いています。これに伴い、1世帯当たりの人員は、単独世帯の増加や核家族化の進行等により減少しており、1975年（昭和50年）の3.5人／世帯から2010年（平成22年）10月には2.4人／世帯に減少しています。



合計特殊出生率の推移



(2) 観光客

本市の観光入込客数は、過去10年間およそ1,300万人から1,400万人の間で推移しており、2009年の宿泊客数は143万人で観光入込客数(1,397万人)に占める割合は10.2%になっています。

観光客・宿泊客数の推移

